

ジャコブ・ロゴザンスキにおける悪の問題

錯覚、憎しみ、反真理

本間義啓(日本学術振興会特別研究員、成城大学非常勤講師)

悪とは何であるか。どのように何かを悪と感じ、嫌悪や排除の対象として構成するのか。いかにして何者かが悪であると忌避され、ついには迫害されるようになるのか。何者かを悪であるとして拒絶、根絶しようとするとき、悪を斥けようとするそのものが悪となりうるのではないか。悪とは、悪と非悪(善や正義)の差異が曖昧になることなのではないか。悪と非悪の差異の消失、両者を取り違える錯覚、これがロゴザンスキにおける悪の問題構制である。彼のアプローチの特異性は、この悪の問題を主体の自己構成に関わる危機として論じる点にある。悪と非悪の差異の消失としての悪は主体のエゴの在り方の問題として究明されるのだ。初期のカント論から現在のテロルについての研究に至るまで、悪の問題はロゴザンスキが自我論を構築し、展開してゆくための試金石となっている。本発表の目的は、いかにして彼の自我論が悪を思考する中で発展していったのかを考察し、悪と非悪の差異の消失がいかにして主体の自己構成の在り方として論じられているのかを分析すること、この二点である。手順としては、1)『法の贈与』でなされたカントにおける法と悪の関係についての解釈、2)『自我と肉』における主体の自己構成を歪める錯覚についての議論、そして3)『彼らは不当に私を憎む』における迫害についての分析を考察することによって、いかにロゴザンスキが悪の問題をエゴの自己構成の問題として形成したのかを明らかにしたい。以下に概略を記す。

カントにおいて悪は法への対立によって規定される。根本悪についての考察でカントは、法への対立を格率として採用する意志を「悪魔的」と呼んだ(これは人間には適用しえない概念とカントは言っていた)。ロゴザンスキは、悪の問題を「悪魔的」な意志の中を探るだけではなく、別の仕方でも論及する。すなわち、悪は単に法に抗するものとして現出するわけではない、と。悪はそれが対抗するところの法の側において現出することがありうる。ロゴザンスキによれば、法そのものと意識に対する法の開示との間には差異があり、この差異において「法の誤った認識」が生じると言う。つまり、法が真であるとしても、それを認識する主体において法が真であるとは限らない。法に服従していると思いつつ悪を行うことはできるし(ヒトラーの「法」に従うアイヒマンのように)、そのとき、法の真理は歪曲され、悪と善の差異は不明瞭になる。この意味で、悪とは善と悪の差異を不明瞭にする錯覚であり、この錯覚において法の真理は歪曲されるのだ。この錯覚と非真理としての悪の問題は『自我と肉』において徹底的に論じられることになる。

『自我と肉』では、悪は法との関連ではなく、エゴとの関連において論及されることになる。ロゴザンスキの思想において「法からエゴへ」の転換が起こり、錯覚、歪曲としての悪は、エゴの真理を歪める錯覚、非真理として考察されることになる。そして、エゴの真理を歪める悪は憎しみという名が与えられ、「反真理の力」として主体形成に関与するとされる。いかなる意味で憎しみはエゴの真理を歪曲するのか。ロゴザンスキは以下のように言う。「憎しみを抱く者が倦むこと無く他者のうちに探しまわるのは自分自身の秘密の部分(自

分の女性性、抑圧された同性愛の傾向[…])である。[…]憎しみが他者に襲いかかるとき、憎しみが滅ぼそうとするのは、自分自身の真理なのである」。私は自己の内なる憎しみの対象を否認するために、それを他者へと投射し、他者においてそれを憎む。他者への憎しみとは、自己の内にあることが耐えられない自己の一部が否認され、それが外部から到来するかのよう現れるという錯覚なのだ。憎しみが外部に向けられる時、この憎しみの対象は自己の内なる他性に由来するのであり、そして、この自己の内拒絶されたものが自己の前に現れるとき、それは憎むべき敵となるのであろう。

内部において否認されたものの外部からの回帰。この憎しみのメカニズムを自我論として分析するのがロゴザンスキの思想の特異性である。『彼らは不当に私を憎む』においてロゴザンスキは、魔女狩り等の迫害という現象の分析をとおして、「憎しみの論理」を究明してゆくことになる。そこで問題になるのは「反真理の力」の現実化の歴史的条件的分析である。いかなるファンタズムが、悪魔や魔女という存在しない悪を見つけ出し、それを敵として殲滅するよう人々を駆り立てたのか。いかにして個人の情動でしかない憎しみが、ある特定の集団を殲滅するに至る迫害行為として組織されたのか。このような問いに答えるために、ロゴザンスキは権力の「迫害装置」についての分析を行う。本発表では問題を限定し、魔女狩りに関する用いられた悪=敵の構築と殲滅の技術の一つである、「言うことができないものを自白させる」という「真理のねつ造」の分析をとりあげ、いかにして迫害がエゴの真理を歪めるのかを考察したい。

「迫害装置」とはまず「発語させる機能をもつ」とロゴザンスキは言う。それは、拷問の末に「悪魔の手先」として自白させる迫害者のディスクール、悪を同定すると同時にそれを殲滅する司法機構として機能する。迫害者は「真理の告白」をさせることによって殲滅すべき悪を作り出す。犠牲者たち自身が発語させることによって、自身がそれではないところの「悪」を、それは自分であると犠牲者に認めさせることによって。このように迫害は告白の形式で自己否定をするようにしむける。特筆すべきは、この告白が単に強要されたものではなく、自由においてなされたロゴザンスキが指摘している点である。被被害者は迫害者の「悪魔がいる」等の信念、妄想を共有してしまっているだけではない。エゴの真理が歪曲され、自己ではないものへと変じるのは、被被害者が自白という発語を通じて、迫害者が投影する対象に同一化するからだと言うのだ。あたかも「(私)に自分自身を否認させ、他者によってその真理を奪われるがままにさせる(欺瞞者(deceptor))」とは(私)自身の内にあるかのように。

真理の歪曲としての悪は、他者に強いられながらも、主体自身の口から表現される。主体の「私は～である」は他者の声によって貫かれている。他者が私に語った「おまえは～だ」を、私自身が私のエゴによって語るからだ。このように、エゴの真理の歪曲としての悪は、聴声経験のひとつとして考えることができるだろう。つまり真理の歪曲は、他者が言うように自分の声を聞くというかたちをとるのではないだろうか。問題は、いかにしてエゴの真理を欺く「欺瞞者」が、エゴが自らの声を聞くという自己の内密性に入り込むのか、である。これが、悪をエゴの真理の歪曲として思考するロゴザンスキが我われに投げかける問いであると思われる。